日本農民新聞
第3102号　2016年1月5日

蔦谷栄一の異見私見

目から鱗の話

TPPがいつ発効になるのか、アメリカの情勢次第であり、2017年にずれ込む可能性があるとはいえ、TPPの流れを押しとどめることは難しい。農業所得の倍増と輸出拡大を目玉にTPP時代に対応した構造改善がすすめられようとしているが、現場の実情はそっち置きにしての、経済性をもっぱらにしての改革論議でしかないように思われてならない。

とはいえ一定以上の農業所得の確保が必要であることは間違いなく、このためには規模拡大を中心としての売り上げ増加をはかるのが一般的なセオリーとなるが、供給過剰の情勢下では言うべくして容易ではない。

もう一つがコストの低減による所得確保である。生産管理、資材管理、販売管理、経営管理等により経営を数値で把握し、他とも比較しながら自らの経営の改善点を見出し、手当していくことが必要であり、このためにはICTの活用が有効である。様々なソフトが開発されるとともに、機器の使い勝手もずいぶんとよくはなった。しかしながらまだまだ使いこなすのは難しいとの抵抗感は根強く、ICTが浸透し使いこなすようになるまでには大分時間がかかりそうで、そうこうしているうちにTPPが発効し、その影響がじりじりと効いてくることが懸念される。

こんなことを考えているおり、先般、フランスで間もなく新規就農予定の友人S君が来日し、2泊3日で関東近県の農業現場を案内した。中核的農家とともに自給的農家も含めた3農家を訪問・見学したが、日本の農業・農家で印象に残ったことは何か聞いてみたところ、日本の農家は時間の観念が乏しいこと、家の中がカオス（「混沌」という意味）であること、の2点をあげた。

具体的に前者は、日本の農家は暗くなっても仕事をしており、いつ仕事を止めるのか分からない。いい意味で言えば時間に関係なく、気が済むまでこだわって仕事をしているともいえるが、S君に言わせれば能率が悪い。フランスの農家は作業の仕方や農業資材の置き方等も含めて、常に効率のいい方法を考えながら仕事をしている。彼らは早く仕事を終えて、その後の時間をもう一つの世界としてしっかりと楽しんでいる、という。後者は家のスペースが狭いわけではないのにいろんなものが散らかっており、実質使えるスペースが乏しい。それだけでなく雑然としてきれいでない。

S君の話は言われてみればそのとおりで、時間の使い方、作業効率、家の中の整頓等については、これまで気づくこともなく議論もされてこなかった盲点である。ヨーロッパではアグリツーリズムやB&B（朝食付き民泊）をはじめとして都市農村交流が盛んであるとともに、都市と農村とで生活感覚についての差が小さいことを不思議に感じていたが、その疑問に対する一つの答えでもあった。こうした身近なところでの改善なり整頓はその気になれば容易であり、またコスト低減や若い人たちの農村への移住促進に大事なヒントを与えているように思われる。日本農業はやり方次第でまだまだ改善の余地があるということは先行きに望みがあるということでもあり、必ずしも悲観するにはおよばないのかもしれない。

（農的社会デザイン研究所代表）